
戦場の悪魔と呼ばれた青年

scan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場の悪魔と呼ばれた青年

【Nコード】

N5375U

【作者名】

scan

【あらすじ】

魔法が存在している世界。その世界では、たびたび戦争が起こっていた。

魔法学園に入学したユキアは、落ちこぼれと呼ばれていた。ある日突然、魔力を完全に失ってしまう。ユキアは、目の前で大切なものを失おうとする時、ユキアの力が覚醒する。

落ちこぼれの少年

「ねえユキアの夢って何？」

六歳ぐらいになる少女が隣に寝ている少年に聞く。

「うん分らないけどずっとこの木の下で寝たらいいな」

「あたしもね、みんなと一緒に居れたらいい」

少女は頬笑みながら素直で真っ直ぐな瞳を向けてくる。その瞳には嘘をついていない。

「おい！二人共先に行くぞ」

「あつ待って」

少女は遠くに居る少年少女の方へ行く。

「ユキアも行こう？」

少女は手を向けて、尋ねてくる。

「うん」

少女の手を掴もうとする。が手を握ることなく視界が歪んでいく。目の前は白い光で包まれていく。目の前に居る少女はどんどん遠くなっていく。白い光に包まれると今度は暗闇が広がっていく。そのまま少年は倒れた。

暗闇の世界が広がる。

「ここは……どこ？……誰かいないの？」

少年は大きな声で周りに呼びかける。でも、誰一人として答えない。

「おい誰かいないの？返事してよ」

この暗闇には少年ひとりしか居ないらしい。

『お前ここにどうやって来た？』

突如どこからもなく声が聞こえた。

「だれ？」

『わたしは……だ。名を言え』

「ぼくは、ユキア。ここはどこ？」

『ここは神に選ばれた者が来る扉の向こうだ。どうやら、お前はこ

ここに来るには早すぎるもう少し成長してから来い。そしたら、全てを教えよう」

「待って！もう一度名前を教えて」

『……だ』

少しずつ声が遠くなる。暗闇も消えていく。

まぶたを開けるとまぶしい朝日が差し込んできた。

「うん。もう朝か」

ドン

部屋の扉が突然開いた。一人の少女が入ってきた。

「ユキア！早くしなと遅刻するよ。」

「うるせーな！朝から。静かにしろよリーナ」

部屋に入ってきたのはリーナだった。

リーナス・リオルド。小さいころからの幼馴染でほとんど一緒にいる。

「うるさいじゃないよ。あんた初日から遅刻するつもり。」

「分かったからリビングに居ろ！支度してくるから。」

「はいはい」

リーナは、入ってきた扉から出て行く。

「そうだ！ご飯出来てるから」

階段の途中で叫ぶ。

俺の家は基本的には一人暮らしになっている。基本というか6年近く一人だが……。その前は、家族3人暮らしだった。母さんは俺が生まれてから3年ぐらいして病気で死んだ。母さんとの記憶は少しあるぐらいでほとんど覚えていない。父さんは僕が8歳の時に突然失踪した。周りに居た人たちが何日も探したが見つからなかった。父さんが何の仕事をしてどんな人と友好関係があったか分からないため、探すのをあきらめた。その後は、リーナの家や母さんの兄夫婦が面倒みたりしてくれた。それから、一人暮らしになった。

着替えを済ませて下に降りるとリーナが本を読みながら待っていた。

「やっと来た。早く食べて行くよ」

机の上には朝ごはんがすでに出来ていた。

「ああ」

5分ぐらいで食べてしまうと荷物を持って外に出た。

「今から間に合いそうね。」

俺らが今から行くところとしているのは魔法学校シーフラスなのだ。

この世界は魔法が存在しているのだ。魔法があると言っても全員使えるとは限らない。使えない人も中にはいる。といっても今になつては7割を超える人が使うことが出来る。だが僕はあまり使うことが出来ない。普通でも少しくらいなら魔力も存在している。

そんな、僕だけと唯一の取り柄が剣術と動体視力である。小さい頃に父さんから教えてもらい。腕は大人に負けなくらいはあると思っている。

そんな事を言っていると学園に着いた。

「ここが魔法学園か……でかいな」

「早く受付してから入学式に行くよ」

「ああ」

シーフラスは予想以上にでっかた。

入学手続きを終えた僕らは入学式が行われる体育館に向かった。

行く途中でラークとラル、ロクトに出会った。この三人も、幼馴染になるがリーナほど付き合いが長いわけではないが大切な仲間ではある。

入学式は以外にもすぐに終わった。終わるとみんな自分の教室に向かった。

「ユキア何組になった？」

「一応2組になった。ラークは？」

「俺も2組だ」

「私も同じだ」

「え、私とロクトだけが三組」

クラスは、1から4までに分かれている。どうやら、俺とラークそれにリーナが同じ2組でラルとロクトが3組になったらしい。

それぞれ、自分のクラスに行き適当に座った。席は決まっていないらしい。リーナは隣にラークは後ろに座った。

「みな早く座れ」

教室の扉が開くと男性が一人入ってきて教壇に立って叫ぶ。座っていない奴はすばやく近くの席に座った。

「え」と俺がこのクラスの担任をするリーガだ。よろしく」

このクラスは、リーガ・アルスが担任をするらしい。特徴が、背が高く20代半ばと若い。

「今日は、入学式で疲れたと思うからこれくらいで終わる。明日は模擬試験を行う。と言ってもお前らの力を知ったり、交流を兼ねたものだから今日はあまり遊び過ぎるなよ。」

そう言うつと教室から出て行った。みんなもそれに合わせて帰って行く。

「私たちも帰ろう」

「それもそうだな。」

横に置いてある荷物を持って立ち上がる。

「ね、買い物でも行こう?」

後ろを向くとロクトとラルがラークを差し置いて尋ねてきた。

「お前らいつ来たんだ?」

「今だよ」

「来るの早いな」

「それより行くのか?」

「俺は、別にいいけどリーナは?」

リーナの方を見る。

「いいよ」

「なら行くか」

四人はドアの向かっていたとき

「俺には聞かないのか」

後ろから声が聞こえた。ラークだった。

「あんたどうせ暇でしょ」

ラルからとてつもない殺気が放たれていて、ラークは何も何も言わずに着いて行った。

学校から少し離れた所にショッピングモールが存在している。俺らは、そこに行き買い物始めた。女子は服を買い男子はその荷物を持つというべたな展開になっていた。

「ね〜これどう？」

「それかわいいね。あっちのもいいよ」

「似合ってるかな？」

「とてもいいよ」

俺ら二人は近くのベンチに座って買うのを待っていた。

「はあ〜」

「ため息つくなよ」

「仕方ないだろ。女子の買い物は長いからよもうちょっと短くならないかな。」

「荷物持つのは俺たちなのいろいろと回るんだよね」

「「はあ〜」」

その時、リーナがこっちに走ってくる。

「どうした？」

「私これが欲しいの」

リーナは、後ろか10着ぐらいに服を見せた。

「お前そんなに買うのか？服ならたくさん持つてるくせに」

「わかってないな〜男は」

ラルもやって来るかごには服が入っている。

「これも俺に買えというのか？」

「そんなわけないよ。ユキアは、リーナのを買ったから」

ユキアはほっとして力が抜けた。

「そのかわり、こいつが買うから」

ラルは、ラークの方を見る。

「何かの視線を感じる」

「買うよね」

ラルからは先ほどと同じ殺気が放たれている。

「買います。買わせていただきます。」

会計を済ませるとロクトが装飾店から戻ってきた。

「お前らも今終わったのか？」

「ロクトお前予知能力でも持ってたのか」

「なんの話だ？」

「気にするな」

ユキアがロクトの肩を軽く叩く。

ロクトの頭の上にはハテナマークがいくつか出現した。

「次行こう」

「ちよつと待てよ。飯にしないか」

「それもいいわね」

（（救われた））

ユキアとラークは神に感謝した。

その後、レストランに入り食事を済ませた。代金は、ロクトが無理やり払わされた。払った後も少しの間レストランに居た。

「ねえユキアってお金どうしてるの？」

ラルが突然問いかけてくる。

「あつ俺も気になる」

「確かに」

「……」

三人共知りたがっている。

「えつと……それは……リーナの親父さんから援助してもらったり、たまにリーナとギルドに行ったりして……。」

「リーナの家、五大貴族だもんね」

「ギルドにも行っているって事はギルドカード作っているの？」

「一応ね」

リーナとユキアはギルドカードを取り出した。その色は、リーナが赤、ユキアが緑だった。

「すごい赤だ」

「リーナはやっぱりすごいな」

その後、ギルドの事などを一時間くらい話して、帰宅した。

世界

ここで、この世界について少し説明しよう。

この世界は魔法が存在した。生活の一部となっていた。魔法には、火、水、地、雷、風の基本属性と闇、光、無の特殊属性がある。次元魔法は訓練すれば誰でも使えるようになる。また、魔力の質によって火は炎、水は氷、風は暴風、地は鉱石、雷は稲妻となる。無属性は歴史上確認されているのは一人しかいない。どういふものは分かっていない。魔法には下級、中級、上級、最上級がありその上は禁術が存在するが封印されていて知る人は極一部。

この国、ファルス王国は世界でもトップ3に入るぐらいの大きな国になる。それを治めているのは国王を始めとする貴族。貴族にも上位、中位、下位貴族があり、その中でも五大貴族はトップになる。五大貴族はリオルド家、シルド家、ボルト家、ウォール家、フース家である。属性は火、水、雷、地、風の順になっていてそれぞれの属性に特化している。

ギルド。それは軍が対応していない仕事を一般人でも出来るようにした仲介所である。世界にはいくつが存在しこの国には三つある。死神の片鱗ルード、大翼ファイン、新緑の光クラッチ。ギルドにはランクがある。下からE、D、C、B、A、S、SS、SSS、の順になっている。ギルドマスターになるにはSSSでないと出来ない。E、Dに関しては誰でも簡単に出来る。上になるにつれて難しくなっていく。その分、貰える報酬も上がる。任務には、護衛や魔物の討伐などがほとんどである。ギルドカードには色によってランクが分かれている。Eは黄色、Dは緑、Cは水色、Bは赤、Aは紫、Sは銀、SSは金、SSSは白金となっている。

模擬戦と使い魔

翌日、学園に行ってみると何やら騒がしかった。最初は模擬戦の事かと思っていたがそこまで騒ぐことでもなかったたので聞いてみた。

「今日何があるんだ」

「知らないのかよ。今日はな模擬戦と一緒に使い魔の召喚もやるんだってよ」

「そうかだからこんなにみんなテンション高いのか」

ようやく理由が分かった。使い魔もことだったのか。まあ俺はどうせしよぼいのが出てくるに違いない。やらなくてもいいのに。

「みんな席に着け」

先生がやって来た。

「みんなも知っているとと思うが模擬戦と使い魔の召喚を一緒に行く。それでだ、模擬戦と使い魔の召喚どっちを先にやりたい？」

みんなに尋ねると帰ってくる答えはひとつだった。

「使い魔」

クラスの全員（ユキアを除いて）模擬戦なんかどうでもいいんだ。使い魔さえ召喚できれば今日はそれでいいのだ。

「じゃ使い魔からだな。第二闘技場に集合な」

そう言い残して教室を出て行った。

魔法すらまともに使えないユキアは使い魔を召喚することに抵抗があった。どうせ低ランクの使い魔がでるとガツカリしていた。

「ユキア行こう」

リーナとラークは既に闘技場に行く準備をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5375u/>

戦場の悪魔と呼ばれた青年

2011年11月16日23時24分発行